

円筒上層式土器における土偶意匠の展開と実態

—認識の更新と深化に向けた素描—

瀬口眞司

目次

1. 序論——検討方針の整理
2. 本論——土偶意匠の検討
3. 結論——円筒上層式土器における土偶意匠の展開と実態

— 論文要旨 —

東北地方北部の円筒上層式土器（縄文時代中期）にあしらわれた土偶意匠の展開と実態について検討した。

学問にとって理想的な姿とは、多様な認識に基づきながら多角的な検討と議論を積み重ね、認識の修正と補完、更新と深化を進めていくところにある。そこで、上記資料の具体的な検討に先行して、筆者自身の土偶に対する認識をまず整理することとし、初期土偶関連資料（後期旧石器時代～縄文時代前期）や、中部地方に分布するポーズ土偶、土偶装飾付土器・土偶付土器（縄文時代中期）などに関する自らの検討を振り返った。結果、次のような認識を持ち得ることを確認した。

- ① 土偶とは、一つの個体だけで成立していたものだとは限らないこと。
- ② 土偶の実体とは、頭部・顔面を象徴するパーツ〈甲〉が、胴部を象徴するパーツ〈乙〉に取りつくことで成り立つ像であること。
- ③ そもそも初期土偶の段階から、土偶は不完全な〈甲〉と〈乙〉の二項に弁別されていたこと。
- ④ そもそも初期土偶段階における〈甲〉とは、必ずしも具象化されるものではなく、基本的には心象的な存在だったこと。
- ⑤ 土偶のあり方には、〈甲〉が〈乙〉にまだ取りついていない α 態と、〈甲〉が〈乙〉に取りついた β 態の二態が見られること。
- ⑥ そもそも初期土偶段階における様態は押しなべて α 態であり、 β 態は縄文時代中期初頭前後に付加された新規のバリエーションであること。

以上のような認識を観察と考察の基盤に据えながら、東北地方北部の円筒上層式土器における土偶意匠を検討したところ、(1)縄文時代中期初頭から5つの段階を経て展開したものであること、(2)基本的には胴部を象徴するパーツ〈乙〉を α 態として土器器面にあしらったものであること、(3)頭部を象徴するパーツ〈甲〉が取りつく β 態は段階4（円筒上層c式～榎林式）のものにはほぼ限られることなどを見出した。

また、さらに一步踏み込んだ考察の中で、(4)土偶意匠をもつ円筒上層式土器とは、 α 態を基本とすることからみて、心象的存在（＝霊的存在）である〈甲〉が取りつくことを待つ「依代」としての意味を併せ持つ可能性があること、(5) α 態を基本的様態とする点は縄文時代前期から連なるこの地域の特性といえ、縄文時代中期初頭からいち早く β 態による造形を付加させていた中部地方とは、この点で大きく相違することなどを指摘するに至った。

キーワード

縄文時代 東北地方 円筒上層式土器 土偶 性質 意味 顔面 土偶装飾付土器 初期土偶